

(銀のエンジェル賞 小学生中高学年の部)

空中で泳ぐ金魚

小四・春日 彩羽

学校からの帰り道、沙菜は、とても憂鬱だった。とても仲良しかった友達の香織ちゃんとかんかをしてしまったのだ。謝ろうと思うのだけれど、謝れない。うつむいて歩いていたので首が痛くなった。パツと顔をあげたとたん、空中にとてもきれいな金魚が浮いていた。赤色の鱗が、太陽の光で、キラキラひかっている。でも、すぐに消えてしまった。沙菜は、晩ご飯を食べているときも、あの不思議な金魚の事を考えていて、夜も中々眠れなかった。

次の日の朝、いつもは起きるのが遅い沙菜なのに、今日は自然と早く起きられた。何故だろうと思いつながらも、学校に行く準備をしていると、またあの金魚が見えた気がした。でも、一瞬で消えてしまった。沙菜は思いついた。あの金魚が見えたらいい事が起きると。さっそく沙菜はいい気分になった。また、学校で、あの金魚を見たら、けんかした香織ちゃんが自分から謝りに来てくれたり、また自分から、自然に謝れたり出来るかもと思ったからだ。そして一時間目が終わった。休み時間にまた金魚を見た。金魚が消えたと思ったら、足が勝手にスタスタと動いて、ついには、香織ちゃんの前まで来ていた。沙菜は、香織ちゃんの顔を見て、真っ赤になった。どうしても謝る事が出来なかった。でも次の瞬間、勝手に口が動きだして、気づいた時には、「ごめんね」と謝っていた。香織ちゃんは、一瞬びつくりしたような顔をしたが、すぐになっこりして、「いいよ」

と言ってくれた。沙菜は、その言葉を聞いて、うれしくなった。また香織ちゃんと友達になれるんだ、と思った。沙菜は、香織ちゃんに不思議な金魚の事を話した。最初は信じてもらえなかったけれど、沙菜が一番最初に金魚を見た所に香織ちゃんを連れて行くと、やっぱり金魚は、居て、香織ちゃんに姿を見せてくれた。香織ちゃんはびっくりしていて、その後、「本当に居たんだね」と、言った。それから、沙菜と香織ちゃんに、どんどんいい事が起きていった。あの不思議な金魚は、沙菜と香織ちゃんだけにしか見えない、二人だけの秘密の金魚になっていった。この金魚に出会えて、二人はとても、幸せだった。あの不思議な金魚は、沙菜が思った通り、いい事を起こしてくれる、金魚だったのかもしれない。もしそうだったら、二人は、とつてもラッキーだった。

夏のある日、沙菜と香織ちゃんが、教室の隅で、あの不思議な金魚の事を話していると、クラスで一番いばっている優太がやって来て、「おい、今の話は本当か?」と、聞いてきた。沙菜と香織ちゃんは、戸惑った。そのまま何も言えないでいると、優太が、「今度、見せてくれよ」と、言ってきた。二人は、ただ、「う、うん…」と、うなづくことしかできなかった。

とうとう、優太に金魚を見せる日が、やって来た。沙菜と、香織ちゃんが、金魚を見た所にいくと、優太はもう、来ていた。沙菜と、香織ちゃんが、「あそこをじっと見て」と、言った。優太は言われた方を見た。だけど、五分たっても、十分たっても、何も起こらなかった。優太は、「なんだ。何も起こらないじゃないか」と、言った。沙菜と香織ちゃんは、顔を見合わせた。二人はうれしくなった。二人の秘密がばれてしまうんじゃないか、と思ったからだ。二人は「これからも、秘密がばれないように、気をつけよう」と、言った。こ

れからも、秘密がばれそうになるたびに、二人は、「えっ。今のは、
私たちが作ったお話だよ」と、言った。

おしまい
